

プラスチックリサイクル化学研究会 会長就任のご挨拶

産業技術総合研究所 加茂 徹

平成 26 年のプラスチックリサイクル化学研究会の総会で、山形大学の多賀谷先生から会長を引き継ぎました産業技術総合研究所の加茂です。

ミレニアムと言うことばが流行り、世紀末と言うよりは 21 世紀へのカウントダウンが始まった 1990 年代後半、循環型社会の構築を目指して容器包装リサイクル法や家電リサイクル法等の社会制度が着々と整備されていました。既存の学会内にもリサイクル関連の部会や研究会は多くありましたが、リサイクルは学際的な分野であり、どの学会においても研究者の数は少なく、成果を発表しても十分に意見交換をすることは困難でした。当研究会は、既存の学会に所属している研究者に新たな横の繋がりを提供し、研究者間の情報交換を促進することでプラスチックのリサイクル技術全体を底上げすることを目的として結成されました。1998 年に第 1 回の研究討論会が岡山大学で開催されて以来 16 年、国内で 10 回、海外で 7 回の研究討論会を主催し、国内外に人脉のネットワークを広く構築できたことが最大の成果と考えています。本研究会を創設し、運営されてきた諸先輩方の努力に改めて敬意を表したいと思います。



1970 年代の石油危機を契機に廃プラスチックの資源的価値が認識され、ダイオキシン問題、埋立地不足、地球温暖化等、その時代の波に翻弄されながらもプラスチックのリサイクル技術の開発は進められてきました。しかし日本で排出される約 950 万トンの廃プラスチックの内、今でも 200 万トンは単純焼却や埋め立てで処理され、500 万トンが非常に低効率なエネルギー回収法で処理されております。希少性の高い元素自身を循環利用する金属に比べ、プラスチックの価値は劣化し易い化学構造に由来するためリサイクルし難く、我々の更なる努力が求められております。

人類の経済活動が巨大化した現在、我々の行動は地球環境に直接大きな影響を与えています。資源を浪費することは未来の人々から資源を奪う行為であり、世代を越えて有限な資源を共有し、循環利用しなければならないことを自覚する必要があると思います。また、環境技術は今後の日本の産業を担う重要な基幹技術であり、当研究会では学術的な知見を高めると共に、新しい産業を創出するベンチャー企業を育成することも重要な役割であると考えております。